

小沼丹作品集

I

小澤書店



小沼丹作品集Ⅰ

定價三八〇〇圓

昭和五十四年十二月十日 初版發行

著者 小 沼 丹

發行者 長谷川郁夫

發行所 株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二一五—十二 郵便番號一〇二

電話 東京(〇三)二六三—九二一八(代表)

印刷 精興社 製本 大口製本

裝釘 山高登

© T. Onuma, 1979 Printed in Japan

目次

村のエトランジェ

紅い花

汽船——ミス・ダニエルズの追想

バルセロナの書盜

白い機影

登仙譚

ニコデモ

村のエトランジェ

白孔雀のあるホテル

氣鬱な旅行

9

36

52

77

115

135

151

187

白孔雀のゐるホテル

帽子

ガブリエル・デンベイ

ペテルブルグの漂民

エジプトの涙壺

エジプトの涙壺

断崖

砂丘

解題

434

411 392 373

338 309 290 246

小沼丹作品集

I

村の エ ト ラン ジ エ

紅い花

僕等は驚いた。女獨りで山小屋に住みたいと云ふのである。黒い服の胸に、オスカア・ワイルドのやうに眞紅のダリヤを一輪飾つた女が立去つてから、僕等は大いに臆測を恣にした。しかし、無論彼女がやつて来る迄は何一つ判らなかつた。

その頃——と云ふのは戦争の始る三年ほど前であるが、私鐵T線のM驛附近にはまだ田園らしい風物が残つてゐた、例へば、なだらかな傾斜を持つ麥畑とか、灌木の茂みに隠された細い流とか、春先になると赤い木瓜の花に點綴される雑木林への小徑とか……。少し歩くと、高い樺の立並ぶ街道があり、農夫の生活を一瞥するにもこと缺かなかつた。

その頃、M驛にやつと改札口が出来たが、それ迄は客は改札口無し of プラットフォームで乗降した。定期の客は、プラットフォームで振つてみせる。すると電車の後部から半身出した車掌はちよいと點頭いてぴりぴりと呼子を鳴らした。切符の客は、どこで渡していいか判らず、うろろろするのが多い。すると走り出した電車から、車掌は大聲にかう云つた。

——破いて棄てて下さい。

逆に胡散臭いと睨んだときは、客に走り寄つて、

——切符を頂きます。

と云へば良かつた。降りる客は多くて五、六人程度だつたから、神經質になるほどのことも無かつたらう。

——兎だつて澤山ゐたんだがね。兎ばかりぢやねえ、狸だつてゐたんだ。

と僕に話して呉れた一人の農夫があつたが、生憎僕は狸は愚か、兎にも一度もお眼に掛る機會を持たなかつた。つまり、兎なぞもう見掛けることは無いが、まだ田園らしい風趣は杖引く人の眼を充分愉しませるに足ると云ふ頃——その頃、僕は大學豫科生で驛から徒歩で十分ばかりの所にある、従兄のHの家に寄寓してゐた。

H家は全くの一軒家であつた。前は松林で右手は畑、左手は田圃でその先に丁線の土堤があり、背後は雜木林、と云つた案配である。尤も畑の先の雜木林の外れに一軒、青瓦の文化住宅があつたが、これはざつと五百米も離れてゐて、お義理にもお隣と呼ぶ譯には行かなかつた。

またH家からM驛へ出る裏手の雜木林の徑を辿つて行くと、百米ほどの所に一軒、山小屋風の建物があつた。或る人物が、手輕に都塵を去つて週末を愉しむために建てた簡単な別荘であつた。しかし、その人物が都合で地方へ引込んだため、Hが管理を頼まれてゐた。別に貸家と書いて貼つてある譯でも無いが、電車のなかから眼に附いたとか、散歩に來て眼に留つたとか稱して、

借りたいと云つて来る者も何人かあつた。事實、借りた人間も、二、三には止らなかつた。しかし、何れも一ヶ月とは續かず退散した。電燈は無いし、井戸も無い。住むには不便に違ひなかつた。

借りた連中は、小説を書くとか、受験勉強をするとか、神經衰弱を治したいとか、理由こそ異れ何れも男であつた。H家は一軒家であるが、山小屋もまた一軒家である。驛迄行く途中家は一軒も無い。とても女獨りで住めたものではない。それに、住まうなんて女はゐる筈が無い、と僕等は思つてゐた。

だから或る日、一人の洋装の女性が現れて借りたいと申出たとき、僕等は啞然としない譯には行かなかつた。

——あんな淋しい所に、お獨りで大丈夫ですかしら？

Hの細君が氣になると、相手は至極落着き拂つてかう云つた。

——だから、却つていいんですの。

彼女は烟草を吹かしながら、靴の先で軽く拍子を取つてゐた。そのため、Hの細君は極めて簡単に、彼女をダンサアだらうと極め込んだりした。背は普通であつたが痩せてゐるのですらりと高く見え、眼の縁には淡い隈が出来てゐた。

僕等はその夜、ダンサアだとか、お妾だとか、不良マダムだとか推測した。

——美人だつたかい？

とHが訊いたとき、細君は答へた。

——さうね、みつともなくはないけれど、あたしはあんな女嫌ひね。おまけに胸に赤いダリヤなんか挿して……。

——赤いダリヤ？ そりやいいね。

もう半年ほど開かれなかつたので、山小屋の南京錠は赤く錆び附いてゐた。窓から覗くと、十五疊ばかりの廣さを持つ、板張りの部屋が一つあるばかりである。

色褪せたラツグの敷物が二、三枚、籐椅子が二脚に卓子が一つ、それに鐵のベッドが一臺ある。壁際に煖爐があつて、この煖爐の煉瓦の煙突が山小屋の外見を何やら人眼を惹くものにしてゐるらしかつた。マントルピースの上の青い花瓶には、誰が入れたのか花が挿してあつたが、色も形も判らぬほど枯れてゐた。天井から古ぼけたラムプがぶら下り、壁にはモロオの繪の複製が一枚、額に入つて架つてゐた。それともう一つ、片隅に梯子が立掛けてあつたが、これは屋根裏に上るためのものであつた。尤も、僕は屋根裏を見たことは無かつたが、建てた人物は、そこを物置替りに使用したものらしい。

これが、胸に紅い花を飾つた女性が借りる迄の山小屋の状態であつた。しかし、間もなく窓にはカーテンが取附けられ、内部を覗く譯には行かなくなつた。例の女性が山小屋に住むやうになつたから。それは、四月も中旬の頃だつたらう。

僕等の驚きはやがて好奇心に變つた。山小屋には井戸が無いから、眼を醒した彼女はH家に洗

面にやつて来る。片手に手桶を提げて来て、歸りに水を満して行く。それは朝八時頃のこともあれば、正午近いこともある。ときには終日在宅することもあるらしかったが、多くは盛装してどこかへ出掛けて行つた。そして僕等は、程無く好奇心の一端を満足させることが出来た。彼女がさる大會社の重役の二號であつたこと、並びにどうやら夫人に頭の上らぬらしい重役の弱味に附近み、多額の手切金を頂戴に及んで山小屋に住み着いたこと、なぞを知るに至つたから。

彼女が來てから五日目ぐらゐに、僕は山小屋の前で彼女と立話してゐる一人のゴルフ服を着た肥つた中老の紳士を見掛けた。二人共莫迦に愛想の好い微笑を浮べてゐた。通り過ぎるとき、僕は紳士がかう云ふのを耳にした。

——兎も角、清遊にはもつてこいだね。

——随分高くつく清遊になるんぢやないのかしら。

彼女は惚けた聲でさう應じてゐた。或はそれが、手を切つた筈の重役だつたかもしれない。

朝、山小屋の前を通ると、ビールの空瓶が二、三本扉口に投出してあることがよくあつた。カアテンが引かれ、内部は見えなかつた。學校の歸途、ときに山小屋に彼女を見掛けることがあつた。彼女は退屈さうな顔で烟草を吹かしてゐたり、ベッドに頬杖を突いて雑誌を讀んでゐたりした。そして僕を認めると、ひよいと頭を振つてまたつまらなさうな顔になつた。

しかし間も無く、僕等は山小屋にときをり姿を見せる一人の男に興味を覺えた。長身の恐しく瘦せた三十ぐらゐの男で、いつ見ても深刻に何か考へてゐる風情であつた。僕はときをり、彼が兩手をズボンのポケットに突込み、憂鬱な面持で雑木林を歩き廻つてゐるのを見た。或は、長い

髪を額に垂らし、窓邊に坐つて本を讀んでゐたりするのを。そんなとき、彼女の姿は見當らなかつた。

山小屋に泊つたときは、次の朝、彼は彼女に隨いてH家に洗面にやつて來た。些かも照れ臭さうな素振は見せず、二人共平然たるものであつた。そして僕等は彼女の話に依つて、そのひよろ長いつぼが、某出版社勤務の詩人上原萬介であることを知つた。

——詩をお書きになるんですの？

Hの細君は、滿更文學的關心を持たぬでもない、と云つた調子で彼に話し掛けた。ところが彼は偉さうな顔をしてちよいと點頭いたに過ぎなかつた。ために細君はひどく感情を害したらしかつた。

——詩人ですつて。でも變に氣取つて厭な奴。

細君は夫にさう云つた。

——詩人は氣取るもんさ。我に詩を與へよ。然らずんば死を、かね。

Hはこの言葉が大いに氣に入つたらしい、得意らしく云つたが、生憎僕等には詩と死が一度で判明しなかつたため、Hは不服らしく註釋を加へねばならなかつた。

しかし、折角名前の判つた詩人はいつからともなく山小屋に姿を見せなくなつた。すると僕等は、彼女が却つて愉快らしい表情を帯び始めたのに氣が附いた。手桶を片手に「ちよいと、あねさん何處へ、手桶を提げて水汲みに」とか歌ひながらやつて來たり、僕等を見ても、こんちは、と大聲に挨拶したりするやうになつた。